HBA HOKKAIDO BASKETBALL ASSOCIATION
TACTICS
タクティクス（ＨＢＡ指導者育成専門委員会ブログ）

北海道ﾊﾞｽｹｯﾄﾎﾞｰﾙ協会
指導者育成専門委員会
2014／04／06（日）
ＮＯ．　１４２

第２６回北海道高等学校バスケットボール新人大会（女子）

北海道バスケットボール協会強化委員会
指導者育成専門委員会委員　川村　健二

「札幌山の手、２年連続、２１回目の優勝、海星は２年連続決勝進出、帯広大谷は嬉しい初の３位、札幌創成、予想を覆しベスト４入りを果たす。」

今大会、山の手は怪我人続出で、主力のエースやセンターを欠いたにもかかわらず圧勝し、本大会 26 回中 21 回目の優勝を果たした。④齋藤を軸にしながらも、正にガード陣がポジションを競うかの如く縦横無尽の活躍で優勝した感がある。そのガード陣はオールコートでしっかりと腰の低い姿勢で相手に喰らいつき、何度もボールをスティール、チャンスと見るやダブルティーム（ピンチ）を仕掛け、相手のガード陣の戦意を徐々に喪失させ、第２ピリオド以降、相手にゲームを組み立てさせないままの完勝。

腰の低さで守り抜く脚力は言うまでもなく、パスの速さ、シュートの正確さは１・２年チームとはいえ道内では別格ではあるが、怪我人が復帰した場合、いったいどんなチームとなって、どんなゲーム展開をしていくのか、それも興味深い。

札幌予選では７位で出場した創成が、２位の東商業を破ってのベスト４へ進出。１年生主体チームながら侮れない、という印象であった。ベスト４のシードを殆ど札幌で占めていたというかつての勢いは今大会を見る限り失せてきている感があり、夏の高体連道予選北見大会の行方が楽しみである。

「海星・帯広大谷について」

海星は昨年に引き続き２年連続決勝に進出し、近年、各全道大会で、必ずシード権を得るまでに成長してきたチームである、

海星高校は室蘭に有って全校生徒数１９０名程のカトリック系私立高校である。海星を指導する中島監督（大阪出身）は、平成１４年から体育教員として勤務、学校は翌年から共学になったがバスケットボール部は無く、正に０からの出発であったと聞く。０から出発し、男女チームを指導して約１０年、室蘭の地で畑を耕し、種を蒔き、実を結ばせるべく歩み続けている。その姿は、かつて本州各地から北海道に移住し、苦労して現在の農業王国を築き上げた先人の姿を彷彿させる。未だ優勝には至ってないが、ここまでの過程と姿勢は地域に浸透しつつあり、他の指導者の励みにもなっている。

帯広大谷は嬉しい初の３位入賞、十勝地区で帯広南商業の戦歴を引き継ぐかの如く、見事３位入賞を果たした。３位入賞ながら山の手戦の敗れ方に憤懣遣るかたない感じであったが、今後、この結果を持続していけるか、今後のチームの活躍に注目していきたい。

「点と線」

今回は１・２年生大会でチームが未完成ということもあり、あちこちに有望な長身選手の存在を目にしたが、当然ながらガードの良し悪しが結局勝敗を左右していたように思う。

近年ベスト４を維持していた旭川藤が帯広大谷に敗れたのも正にガードの差であった。

早いパス回しでチャンスを狙うというのは、結局受け手が素早く準備してタイミングよくキャッチすることが可能かどうかにかかる。パスを送る判断力にも又左右されるが、状況を判断して気を利かせてボールを受けるための準備の意識と動作が山の手と他チームとの大きな差があったように思う。

今回は他チームの３・４・５番目がフロントコートの茶屋で一服、深呼吸して一休みしている間に、ガードが送球路・捕球路も断たれ、点となって孤立し全く勝機を見出せずに終わってしまった感がある。

守る息をもつかせず、攻撃の隙をも与えない、そうした山の手バスケットにどうやったら勝てるか。

攻撃時、選手の可動性を広げ、ディフェンスと同様以上に、まず３・４・５番目の早い準備とキャッチ、更に３秒以上は絶対個人でボールを保持しないこと、点から点へ繋いで線として、素早くオールコート及びピンチディフェンスに対抗できる策を取らない限り勝機は生まれないように思う。

しかしこの競技の面白さと難しさは、例え点が線となって流れる如き攻撃であっても、シュート力は次の問題となるところに有る。

推理小説ではない新たな「点と線」のストーリーをどのチームがコートに描くのか、その日を楽しみにしたい。

最後に３日間の大会期間中、苫小牧地区協会、各校の先生方に大変お世話になりました。紙上をお借りしてお礼を申し上げます。